慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	和学者の経済学説
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.1 (1924. 1) ,p.1- 20
JaLC DOI	10.14991/001.19240110-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240110-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾の
三田通りの
カフエー
米
電話高輪二二六六
●カルピスとソーダ水
●熱いコーヒーと紅茶
●宴會至便料理と菓子は御存じの美味

三田學會雜誌　第十八卷　第一號

論說

和學者の經濟學說

瀧本誠一

余が本文に於て和學者と稱するのは、神代より我が國生粹の神道を承傳して居ると云つて、或る一部の人々に尊み敬まわれて居つた中臣卜部兩家の正統を承くる眞の神道者流を云ふのではなく、又例の伊勢貞丈に邪說だの妄作だのと、口を極めて呵られた唯一神道や、三敎一致を說ける怪しげなる僞神道者を云ふのではな

く、加茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等の各大家に依つて代表せらるゝ一流の學者を云ふに過ぎないのである。而して其の中には山崎闇齋派に屬する（漢學者以外の）神道學者も一切皆之を包含して和學者と稱するのである。

和學者は我が日本の神道とか皇道とかを根據として、立論し、君臣の道を五倫の本とし、忠を以て五倫の第一位に置き、義勇仁惠を政治の主義とするのであつて、岡田盤齋が所謂理學の神道（行法の神道と區別して）を修めんとするものに外ならないのである。後來和學者の多くは道の本體を忘れて和歌詞章の末技に拘泥し、卑猥なる物語ものなどの軟文學に沒頭して、得々と和學者を氣取るの弊風ありたるは、恰も漢學者が無意味なる字義音讀の詮議に一生を過し、作詩修辭を以て學者の能事畢れりと思ひ居たるに異ならざるのである、斯くの如きは古今何くにも免かれ難き學界末世の通弊として、姑らく之を論外となし、兎に角生粹の和學者なるものは支那崇拜の漢學者などが攻擊するが如き淺薄無意義の妄說妄談を唱ふる人々のみでなく、學說としても多少研究に値ひするものあつたとは疑ないであらう。

一體和學者の學說は概ね偏狹にして辯言多く、詰らぬ事を誇張して御國自慢を事とするの弊あることは是亦疑もなき事實である、例へば、我國は天地ひらけし始め、萬國に先だちてあらはれ世界に秀で勝れたる國であるなどゝ愚にも付かぬ事を、眞面目で仰々しく述べ立て、或は我が國は言葉の國であつて、地球上に日本ほど言葉の正い國はないと唱へ、或は又日本は豐葦原の瑞穗の國で、五穀殊に米穀の佳良なることは世界に比類がないと自慢するなどは、所謂井蛙の見であつて、他愛もない小兒が內の親父ほど豪い者はないと思つて居ると同じ樣なことである。

橘南谿と云ふ人の北窓瑣談にこんな事が書いてある「支那の程赤城年六十に過ぎて再び渡來す、如何なる故ぞと問ふに、第一、日本の飯に馴るれば支那の飯はまづくつて喰へない、第二、日本の酒の樣な甘い酒は支那にはない、第三、味噌汁と香の物とは支那にない、夫れ故日本へ來て生命のあらん限り之を味はんが爲めに再び渡來したと云つたとの事であるが、誠に米、味噌、香の物など我國に生長せる人々は其の味の甘き事を知らず、長崎へ來る支那人中勝れたる上戶でも、日本の酒は三ツ一ツも飲み得ず、直ぐに酩酊すると云ふ、日本の米穀、萬國に勝れて精良なれば酒も味、濃かにして醉ふことも甚だしと云ふ」などゝ云て居るに至つては殆んど滑稽に類

する幼稚の思想であるが、コンな事が和學者大多數の通說であつたのである。

平田篤胤の門人であつて日本有數の經濟學者として知られたる佐藤信淵は、其の著宇內混同秘策に於て、「皇大御國ハ大地ノ最初ニ成レル國ニシテ世界萬國ノ根本ナリ」と冒頭して、世界萬國の人民を救濟するは、我が皇國に主たる者の天職であると云ふ事を述べ、續いて世界萬國を臣服せしめて、我が王化に濕はしむるには、先づ軍備の欠けて居つて防禦の薄弱なる滿洲韃靼沿海州等より着手すべしと云ふことを論じて、其の侵略の方法を秩序的に記るし、且つ「日本內地ニ餘リタル餘米ヲ滿洲へ輸出シ、初メハ通商貿易ヲ爲シテ夷狄ニ日本ノ良米ヲ喰ハシテ土人ヲ歸服セシメハ、韃靼悉ク皇國ニ傾カン、何トナレバ凡血氣アル者ハ美食ヲ好マザルハナシ、韃靼人ハ草根木皮ト獸肉ノミヲ食用セル者ナリ、皇國ノ良米ヲ食ハシメバ悅バザル者アルコト無シ、且又馬湩（馬の小便）ヲ飲ンデ宴セシ者ニ代ルニ皇國ノ美酒ヲ飲マシメバ狂喜心醉シテ歡バザル者アランヤ」と云つて、日本の良米と美酒とで滿洲を取つて仕舞ふと云ふ大抱負であつたのであるが、コンな滑稽じみた說は和學者一流の人々に珍らしからぬ通弊であつて、元とは皆豐葦原の瑞穗の國と稱する神秘的の迷信に基因する誤りである、故にコンな馬鹿げた意見は純乎たる學問上の見地より之を批判するの價値なきことは勿論云ふ迄もなきことなれども、實は斯くの如き埒もなき滑稽談は德川時代には和學者に限らず、漢學者でも蘭學者でも、其の他雜學者でも大抵皆此の位の淺墓なる理想に過ぎなかつたのである。

然しながら如上は唯だ和學者の說の一端を擧げて其の欠點のみを指摘した話であるが、今顧みて彼等の美點を探り、其の長所を採つて之を批判するときは、又我々の學問上に多大の貢獻が無かつたとは云へないのである、余は今茲には主として經濟學說の上から和學者の意見の一班を概括的に示して斯學を研究する者の參考に供せんとするのである。

和學者の意見と云つても、皆が皆、一樣に同一の說を唱へたものとして取扱ふことは出來ないであらう、一々細かに看察してみれば、人々個々、各其の說を異にすべきは固より論を待たざるも、大體之を一括して概論すれば、彼等の間には自ら共通の特徵あることは明白にして、而かも此の特徵の最も顯著なるものは二つであつて、其の一つは國家觀念で、他の一つは現實主義の發揮であらう。

元來日本の古き學者の頭腦は夫れ〴〵三つの組織分子より成立して居るのである、第一は日本固有の和學思想にして、第二は支那傳來の漢學思想である、第三は印度より支那を經て輸入したる佛教思想であつて、此の三つの思想は何れの學說中にも多少混同して居つて、明かに之を分析類別することは殆んど不可能であらう、和學思想の中にも漢學思想の分子が混入し、漢學思想の中には和學思想若くは佛教思想の混入を免かれずして、皆何れも單一純白の思想ではなかつたのである、が、兎に角德川時代の學者の頭腦は先づ大體此の三つの思想の何れかで陶冶鑄成せられて居つたものである、而して德川氏の中世以降漸次蘭學の入來と同時に醫學本草學等の方面には多少その勢力を蒙りて、別に又西洋思想の侵入を見るに至りたるも、政治經濟思想の領域內に於ては大體上記三思想の外に認むべき勢力はなかつたのである。

而して上記三思想の中、第二(漢學思想)第三(佛教思想)は概して國家觀念には甚だ乏しかつたと云ひ得らるゝのである、勿論漢學思想を鼓吹した人々の中にも國家觀念の甚だ强盛であつた者も少くないのである、例へば山崎闇齋派の學者は皆ソレであつたことは余の辯を待ざる所なるべく、又ソレでなくとも水戸の學者の中には日本固有の學說を發揮した者、往々之れあつたのであるが、元來斯くの如きは崎門學派であつても、又水戸の學者にしても、純粹なる漢學思想に基きたる意見にあらずして、彼等の頭腦の中には和學思想が多大に混入しあつて、其の勢力に左右せられ居たる結果に外ならなかつたのである。

又佛教思想に養はれたる人々にして、殊に國家觀念を發揮したる者も亦決して鮮少に止まらないのである、幕末に於ける勤王僧などは皆其の實例であつて、彼等は皆熱心に國家の大問題を討議し、政治の得失を研究したるのみならず、實際政治運動に盡悴して身を犧牲にしたる者も往々之れなきにあらざりしも、其の實彼等の多くは自家の理想とする國家觀念を發揮したと云はんよりは、寧ろ宗教家の立場にあつて、新に入來らんとする外教に對し、國家を楯に取つて、其の侵入を防がんとしたるまでの事にして、眞に國家觀念に基きたる純白の行動であつたと認むべきものは甚だ少なかつたことゝ思はる。

之を要するに支那より傳來せる純粹の漢學思想と、印度より傳來せる根本の佛

教思想とは其の派の何たるに拘はらず、教理とし學説としては、共に個人主義であつて、國家と云ふ觀念は皆無とは云へないが、比較的餘程欠如して居つたことは明かであらう、ソレは何故なるかと云へば支那や印度の政體、國情、其他一般社會の狀態が然らしめたものに外ならざるが如し。

然るに和學思想はソコが日本固有の思想、否、日本の歴史の上に形ち造られたる特種の思想であるが故に、日本の古き社會制度には宛も能く適應して居つたのである、乃ち之を詳言すれば日本の社會制度は太古より殆んど他の民族を混入したることなく、少なくとも他の民族に征服せられて、其の文化を强ひられたる事もなく、有史以來先づ相當に純粹に近き大和民族の一聚團であつて、言語文字を同くし、風俗習慣を同くし、歴史傳説を同くして、而かも頭には民心歸向の中心點となる萬世一系、金甌無缺の帝室を戴きて、萬民齊しく一人の例外もなく、誠意誠心を以て之を奉戴して居るのである、故に我が大和民族は一つの大なる家族の一聚團である、天皇は此の大家族の家長であつて、我々國民は皆一同一人の例外もなく、兄弟姉妹であつて、陛下の赤子であると信ぜられて居るのである、即ち和學は此の歴史を基礎として、其の上に立てられたる學問なるが故に、國家觀念が和學の基礎觀念であると云ふことは今更辯明の必要はなからう。

ソコで德川時代に於ける和學者の意見は皆國家を無上のものとし、何でも彼でも國家の爲め、御國の爲めと云ふことが其の唯一の理想であつて、所謂る國家觀念は和學者に依つて事實上に實現さるゝ事が多かつたようである。

茲に一つの注意を要することがある、ソレは漢學思想を鼓吹する者にても勿論忠義と云ふことは盛に云ふのである、併し漢學者の忠義は大抵忠恕の忠、仁義の義であつて、日本の君主に對する忠義ではないようである、己に祿を呉れ、先祖代々愛くしみ養つて呉れた人に對する忠義であつて、國家の元首に對する眞の忠義ではない、例へば大石義雄の如き忠義であつて、己が祿仕した主人に對する忠義を云ふに外ならないのである、大石義雄は侍は主人を取つて祿仕したならば、眼中天子もなければ將軍もないと云つて居つたそうであるが、元祿の暴擧は眞に其の理想通りをヤツたもので、敕使の席を汚し、將軍家の禮法を犯して恣まゝに狼藉を働らきたる暴主人の爲めに、己も亦其の志を繼ぎ、其の跡を追ふて同じ狼藉を働いたもの

に過ぎないのである、義雄は山鹿素行に學んだと云ふことであるが此の山鹿と云ふ男も、元とは漢學仕込の人であるから、義雄には矢張僞忠義を敎へたのかも知れないのである、要するに義雄は小說家や戲作者の爲めに忠義者とせられたのであらうが、其の忠義は漢學者の忠義で日本の國家に對する忠義でなかつたことは明白である。

然れども和學者の忠義は祿を貰つたとか、養つて貰つたから、其の人に酬ゆると云ふ樣な意味ではなく、眞僞の問題は兎に角日本の歷史を根據とし、天子は萬世一系の天子であつて、日本建國以來此の御國の御主人であると云ふ絕對的の觀念に基因する忠義であつて、恩を受けようが受けまいが、祿を貰ふが貰ふまいが、宮仕をしようがしまいが、ソレには關係なく、日本國に生れ來た以上は國民の絕對の義務として國家に對する廣き意義の眞の忠義を主張したものである、故に和學者は此の普遍的なる統一したる忠義の觀念の下に國民の根本思想を纏め、從來長く封建制度に依つて狹き一藩內の利害問題に局限せられたる區々たる地方的觀念を打破し、國家經濟の爲めに進步發達の通路を開きたるの功績なしと云ふ可らず、一般に國民が義雄の如き封建的の忠義に拘泥し、藩主、藩臣、藩中、藩內など云へる狹隘なる思想に囚はれ居たらんには我國は遂に國家經濟の基礎を確立するの機會がなかつたであらう、乃ち換言すれば義雄の忠義に依つて言顯はさるゝが如き狹き一藩內の經濟が廣く全國に普遍的なる國家的の經濟に潰されたのが、日本今日の進步を爲したる一つの大原因であつたのであるが、ソレには和學者の國家觀念が大に與つて力あつたのである。

次ぎは和學者の他の一つの著るしき特徵である現實主義の事であるが、彼等は一部の漢學者等には痛く排斥せられ、神道とか國學とか云へることは皆彼等が支那の聖人の敎やら、佛家の說などを模擬して僞作したものであると誹謗して居るも、ソレは姑らく論外となし、和學者の所論が概して朱子學や陽明學などよりは比較的淺薄であり、又禪學などに比すれば固より大に卑近にして取るに足らないと云へば、或は其の理なきにあらざるも、ソレが則ち和學者の思想に特徵として顯はるゝ現實主義の存する所であつて、彼等は常に大に此の主義を發揮し、勉めて禪僧めきた空談を避くることに注意して居つたのである、是れが近世の言葉で云へば

經濟的唯物史觀とでも云ふべきことであつて、現在の實社會に適應する實利主義の觀念を經濟思想の中に注入せんと試みたる和學者の努力は其の目的の成否に拘はらず、直接若くは間接に學界に貢献する所甚だ多大であつたと云はねばなるまい。

一體東洋の學說は多くコウであるが、殊に漢學者等は唯だ主として個人の身の修め方を說き、大學にある誠心誠意の說を一本鎗となし、心を正くし、身を修めて行きさへすれば、ソレで家も世の中も、國も天下も、皆自然に治つて行くものと思つて居つたのである、即ち自己の心の學問が彼等の研究の「アルファ・ラーメガ」であつて、常に無形の心中に屬することを彼此八かましく云ひ、宛も雲を捉ふるが如き空理空想を唱へて、己一身さへ高尙に廉潔に行つて行けば此の浮世の名利などはドウでも宜いと思つて、否、言つて居つたのである、是が宋儒の性理學として知られたる學派であつて有名なる朱子が其の張本人であつたのであるが、此の性理學の說は禪學者流の說と殆んど同じ樣の思想であつて、漢學者等は此の根本思想より、德は本なり財は末なりと云ふ一節を誤解して、財即ち經濟的財物に關する事は一切君子の問ふべき事にあらずとして、口に理財を談ずるときは、小人として之を擯斥するが如き飛でもなき惡風を生ずるに至つたのである。

例へば朱子は有レ國則不レ患レ無二財用一と云ひ、司馬光は善理レ財者不レ過二頭會箕斂一爾と云つて居るが如き驚くべき學說が我が日本にも宋學の流行と與に益盛になつて學者は何れも誠心誠意の學に惑溺し、徒らに禪學めきた空說のみを事とするに至つたのである。故に山鹿素行は「聖學の傳、宋に到りて每に過高の病あり、故に學者近きを舍てゝ遠きを求め、下に處りて高きを窺ひ、心を空妙の域に馳す」と（語類）云つて、架空の學說の無用なることを述べたれども、宋儒の性理學の弊は實だ無用無益に止まらずして、實際社會に甚だしき害毒を流したのである。

唐の忠臣に張巡と云ふ者あり、安祿山の亂に睢陽を敵に圍まれ、籠城すること多年、一萬に足らぬ城兵を以て敵兵十二萬人を殺し、食盡き馬を食ひ、馬盡きて人を食ふ、援兵來らずして城遂に陷つて打死す、忠烈無雙と云はねばなるまい、而して唐の朝廷に於て忠臣を追贈するの議ありしとき、例の性理主義の學者等は張巡の贈位に反對し、多くの人を殺し人を食したるは人道に非らずとて贈位どころか、却て罪

せられんとしたるに、其の時代は幸に未だ性理學が左まで、盛でなかつたが故に李輸と云へる人の上書に依て罪だけは赦されたのである、然るに宋の時代に於ては此の性理の學は全盛を極め、國家など云ふ事は區々たる一國の事で取るに足らず、學者の眼中には國家はない、要する所人道を主とし、個人の發達、一身の安心を得せしむるのが學者の本職であると主張するが如き飛でもない高尚の議論が盛なりしかば、例の有名なる忠臣岳飛は國家の爲めに敵と戰ひ、屢々大兵を打破つて多くの人を殺したるは人道に背けりとて、其の子、岳雲及部下の張憲等と共に皆殺されたのである、（大久保仁齋富國强兵問答に據る）是は皆宋の性理學派が天理を存養し道心を持維するなどゝ云へる迷ひの學説の犧牲となつたのである。

如上の樣なる危險思想が德川時代に於て漸々と日本へ入り來らんとしたるを根本的に防いだのは政府の政策でも何でもなく、主として和學者の功勞であると云はねばなるまい。

勿論漢學者の中でも所謂古學派の人々例へば山鹿素行、伊藤仁齋父子、就中護園一派の人々は古の聖人の敎は斯る心理的のものにあらず、全く物質的なる經世濟民の學であつて、禪坊主みた樣に、家も棄て、國家も棄てゝ、自己一人の心を治めさへすればソレで濟むと云ふ樣な馬鹿げた敎にあらざることを極力辯じたるも、何分彼等の多くは漢學一邊の儒者であつて、日本の歷史を無視し、只管支那の風を其の儘に眞似んとしたるより、其の議する所論ずる所多くは實際上の事實に當て嵌らずして、迂遠迂濶の誹りを免かれなかつたのである、然るに和學者は之に反し、其の學説の多くは國史に基礎を置きて、意を手近かなる實學の鼓吹に留め、夫の禪學者が悟りを開くとか、宋儒が天理存養、道心維持などゝ云つて解脫の和尙めきたる空想を述べたることを排斥して全然取らなかつたのである。

今茲に一例を示して見れば、平田篤胤の「悟道辨」と云ふ書は禪學者流が悟りを開くと云つて他愛もない譯の分らぬことをシャベッテ人心を誑らかしつゝある惡風を矯めんとの主意を詳かに述べたものであるが、其の中に本居宣長が曾て其の著「玉勝間」に記るして居る事を引き「弘長三年十一月、北條時賴最明寺ニテ身マカリケル時ノ頃トテ、業鏡高懸三十七年、一槌打碎、大道坦然トアリ。北條足利ノ世ノホドハ高キモ卑キモ人皆禪法ニ惑ヘリシカバ死ムトスル際ニカヽル悟リガマシキ僞

リ言スルヲ、イミジキ事ニ思ヘリ。最ウルサク且ハ嗚呼ナル態ナリケリ」と云つて居るのを證據に出し、世の中の人が坐禪、悟道、又清談など唱へ、徒らに悟りめきた事を云つて肝心の世の中を棄て國家の事も社會の事も、一切度外に置いて獨りよがりをするは怪しからぬと云つて盛に攻擊して居るは痛快の至りである。

篤胤は又進んで此の悟道と云ふことは其の元は佛法より出でたことなるも、其の事實は古より支那に盛に行はれたことで、堯の世に許由が天子の位を讓られたのを汚はしいと云つて遁れたこと、及巢父が許由を呵り付けた事などを記るして、其の阿房らしきことを嘲笑し、又魏晉の代には清談と云ふことが流行し、國も家も世の中をも顧みず、徒らに大言するものを尊んで賢人だの其志を高尚にする者だのと持て囃やして、大に之を尊敬したことがあると嘲つてコウ云つて居る「魏晉の代には清談と名けて何か潔げに大平樂を云ひ、態と放曠にして行を愼まず、大酒を食い、世に異なる事を業とし、底ゆかしげに人に思はせんとしたる心汚き者共が大分有つたでござる、其の放蕩無賴の限を盡せる阮籍、嵇康、山濤、向秀、劉伶、王戎、阮咸を竹林の七賢人とは申すでござる、貝原益軒は彼等を評して賢人など云ふべきものではない、殊に阮籍などは世事を忘れて仕舞ふと云ふ事を美談としながら己は從事中郎と云ふ官職に就き、ソレを罷められた後も竊かに司馬昭に媚び諂ひて就職を求めて居つたのは小人の情僞、嘔吐に堪へたりと云ひ、又此の人は大人論と云ふを著はし、禮法に拘はる士をば犢鼻褌に居る蝨に比べたが己が司馬昭に媚附きたることそ犢鼻褌の蝨であると云つたのは其の通りのことで、益軒の評は適切である」と云つて、大に清談者流の愚を罵倒して居るが、和學者は篤胤に限らず何れも皆悟りなど云ふことは全く愚人を惑はす計策に外ならずとして、極力之を排斥して居るのである、宣長の歌に「悟るべきこともなき世を悟らんと思ふ心ぞ迷ひなりける」と云つて居るが、彼等一派の和學者は、大抵斯くの如き思想であつて、高妙なる空論よりは寧ろ卑近なる實學を取つたものと思はる。

茲に悟道の事に就きて一笑話がある、駿河の原の宿に居つた有名なる白隱は矢張この悟道の宣傳者であつて、常に說教の折には自分の片手を人の前へ突き出して、此の音を聞いたか、拍たぬ片手の聲を聞けと云つて、人を悟道に導いたそうである、所が原の宿には其の當時白隱和尙よりヨリ以上に眞に悟て居た人があつたの

である、ソレは其の原の宿の米屋であつて、其の男は白隱の悟「道ッラ憎しと思ひ居たりけん、或る日彼が寺の門の扉へ筆太に「白隱が片手の聲を聞くよりも兩手たゝいて商内がまし」と書いて置いたれば和尚スカサず返へし歌をよみ「商内が兩手扣いて成るならば片手の聲は聞くに及ばず」をヤッタそうである、コンな詰らぬ馬鹿げた事で、悟道だの何んだのと云つて、世の中には之を信仰する者が中々多かつたのである、ソコで宣長や篤胤の一派は、是等の妖説を破して、社會の實生活に適切なる實利主義を敷衍することに勉めたのであつて、其の點は確かに漢學者に優る大功あつたと云はねばなるまい。

さて是れ迄述べ來つた所は和學者の二つの特徴に就いて一般的の概評を下したゞけのことであつて、而かも經濟上の各問題に關し、夫れ〴〵詳細に彼等の意見を紹介することはしなかつたのであるが、若し一々細目に渉つて各家の説を列擧評論したらんには中々興味に富める面白き意見が少なくないのである、今その一例を掲げて見れば本居宣長の「玉くしげ」に論じて居る所などは最も著明の實例であつて、彼が此の書の中に貧富懸隔の弊を論じ「世間の困窮に付ては富める者は彌益、富をかさねて、大かた世上の金錢財寶は富商の手に集る事也」と云ひ又「何に付ても貧人と富人との境は甚だしき違ひにて、貧人は富人の爲に貧を増し、富人は貧人によりて富を重ぬる也」と云へるが如きは、全然今日の社會主義者と同一の口調であるが、宣長は前に述べたる如く徒らに大言壯語して實行の出來ざる空疎の意見を唱ふることを嫌へるが故に此の場合に於ても特に温健の説を主張し「いか程多く蓄へ持ちたればとて、これ皆上より賜りたるにもあらず、人の物を盗めるにもあらず、法度に背きたる事をして得たるにもあらず、皆是れ面々の先祖又は己が働にて得たる金錢なれば一錢といへ共强ひて之を取るべき道理はなし」と云つて富人の財貨を無理無償に没收することには反對したれども、政府は何とか良策を施して富人の手元に有り餘る財貨を以て貧民を救濟すべしと云ふ頗ぶる穩健の意見を述べて居るのは眞に一讀の價値ある點であらう、一體此の「玉くしげ」を云ふ書は著者が紀州候へ提出したる意見であるが、其の内容は德川時代に於ける和學者の經濟意見を窺ふに足る最も重要なるものゝ一である。

尚此の外に於ては平田篤胤の和漢度量衡に於ける、本居内遠の田制及社會制度

に於ける、色川三中の田制及貨幣制度に於ける、小山田與清の社會制度に於ける、梅辻飛驒守の都市貧民處分問題に於けるが如きは、何れも大に見るべきものであつて、和學者が此等の點に於て我が經濟學に貢獻したることは決して鮮少に止まらないであらう、然れども既に本論の初めに於て指摘したるが如く和學者の意見は兎角偏狹にして日本の外に國あることを知らず、其の對外關係の事に付きては殆んど皆言語同斷の妄說を唱へ、又我が建國の歷史に對する彼等の態度は唯神祕的の傳說を妄信するのみであつて、少しも學者的の研究を爲さゞるは我々の甚だ遺憾とする所なれども、又其の半面に於ては前記の特徵を發揮して斯學の發達に多大の貢獻を爲したることは余の斷じて疑はざる所である、余は更らに他日を期し、經濟上の各問題に涉り、和學者各家の意見を細評するの機會あらんことを望む。

鐵道賃率制禦策としての賃率認可の制度に就いて

增井幸雄

一

鐵道賃率に對する制禦は、既に鐵道の創成の當時から其の必要が認められ且つ實行せられて來た。所が、賃率の將來に於ける趨向如何といふ點に就いては、思ふに、それが將來益々引上げられるの虞れあることは容易に觀取せられたに拘らず、それが却て低落を來すことあるべき一事に至つては全く感知せられなかつたものゝ如く、又賃率に關して起り得る弊害が高き賃率中に存することは了解せられても、低き賃率中にも同樣に弊害が生じ得ることは了解せられて居らなかつたものゝ如くであつて、當初の頃に於ける賃率制禦の眼目は主として其の過當なる引上を豫防するの一事に置かれてあつた。而して此の目的を達するの手段としては、時としては個々の特許狀又は仕樣書中に於て此の賃率を一定の額に指定する